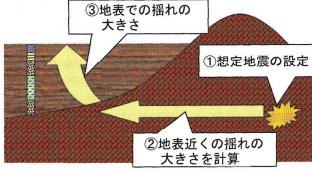


# 揺れやすさマップ

## ◆揺れやすさマップができるまで

本町内の地点ごとに、考えられる最大の震度を表示したのが、揺れやすさマップです。揺れやすさマップは、地震防災マップ作成技術資料（内閣府、平成17年3月）を参考にして次の手順で作成しています。

- ① 本町に大きな影響を与えることが予想される地震を選び、震源や規模などを設定（「本町で想定される地震」に示した地震について検討しました。）
- ② それぞれの地震について震源からの距離と揺れの強さの関係を用いて、地表近くの硬い地盤までの揺れの大きさを計算
- ③ 表層の地盤の揺れやすさを加味して、想定される地震ごとの震度分布図を作成
- ④ 想定される地震ごとの震度分布図のうち、その地域で最も大きな震度を採用し、揺れやすさマップを作成
- ⑤ 本町においては、右表の3種類の地震を想定した結果「全国どこでも起りうる直下の地震」を採用



## ◆本町で想定される地震

地震のタイプ	活断層で発生する地震	プレート境界で発生する地震	全国どこでも起りうる直下の地震
想定する地震	鶴川低地断層帯で発生する地震 (マグニチュード7.3程度)	東京湾北縁地震 (マグニチュード7.3程度)	本町直下の地震 (マグニチュード6.9程度)
地震の概要	未解明の部分が多い活断層ですが、地盤が発達すると南西で震度6弱、北部で震度5強の揺れが予想されています。	近い将来、関東地方南部のいずれかで起こる可能性の高いブート発熱のマグニチュード7.3程度	この地震は、いつどこで発生するか予測すること困難です。※
本町で想定される震度	6.8 6.1 6.0 5.9 5.8 5.7 5.6 5.5 5.4	6.8 6.1 6.0 5.9 5.8 5.7 5.6 5.5 5.4	この地震は、いつどこで発生するか予測すること困難です。※

\*内陸で発生する大きな地震は、「活断層」として記録され、数千年周期で繰り返し活動をしています。一方、地表に現れていない「活断層」が活動し、大きな被害を及ぼすことがあります。このような地震の規模は、マグニチュード6規模（最大で6.9程度）までですが、全国どこでも発生する危険があります。

なお、下の図は本町の各地域の直下で地震が発生した場合の震度を表示しています。このタイプの地震では、全ての地域で同時にこのような大きな揺れになるものではありません。



## ◆震度階級・計測震度

### ▶ 地震の大きさ＝震度とは何か

地震が起っこったとき、ある場所での揺れの程度を示すのが震度です。これに対して、地震の規模を示す言葉がマグニチュードです。震度の決め方は国によって異なり、わが国では気象庁が定めた震度階級によって震度を表しています。震度には、身体に感じない地震の震度0から震度1, 2, 3, 4, 5弱, 5強, 6弱, 6強, そして震度7までの10階級に分けて発表されます。

震度階級	震度7	震度6強	震度6弱
人の体感・行動	立っていることができず、はかないと動くことができない。揺れにほんとうされ、動くこともできず、飛ばされることがある。	立っていることが困難になる。	
屋内の状況	固定していない家具のはほとんどが移動したり倒れたり、飛ぶことがある。	固定していない家具の大半が移動し、倒れるものもある。ドアが開かなくなることがある。	
屋外の状況	壁のタイルや窓ガラスが破損、落する建物が多くなる。補強されているブロック塀のはほとんどが崩れる。	壁のタイルや窓ガラスが破損、落する建物が多くなる。補強されていないブロック塀のはほとんどが崩れる。	壁などに軽微なひび割れ、亀裂がみられることがある。
木造建物 (住宅)	耐震性が高い 耐震性が低い	壁などにひび割れ、亀裂がみられることがある。	壁などにひび割れ、亀裂がみられることがある。
		壁などに大きなひび割れ、亀裂が入るものが多くなる。傾くものや、倒れるものが多くなる。	壁などに大きなひび割れ、亀裂が入ることがある。瓦が落了下来したり、建物が傾いたりすることがある。倒れるものもある。

出典：気象庁震度階級閾値解説表

## ◆緊急地震速報

地震はP波と呼ばれる小さな揺れのあと、S波と呼ばれる大きな揺れが来ます。緊急地震速報は、このP波をとらえ、地震の規模や震源地を予測し、大きな揺れのS波が来る数秒から数十秒前に発表するものです。

ただし、震源の近くでは、情報が間に合わないこともあります。また、予測震度で、プラスマイナス1程度の誤差があるといった技術的な限界もあります。しかし、わずかな時間を生かして、地震の被害を減らすことができるものと期待されています。

